

「自衛隊なのに、企業の事業部や工場の退職者親睦会と比較しても加入率は低い。防大や幹候校などの同期会へ注入するエネルギーが膨大過ぎるからであろうか。一考を要する。

最後にこの種の調査研究を半世紀も続けてこられた研究会メンバーに敬意を表すると共に、明治時代からミリタリー・カルチャーを伝承してきた「偕行」もご協力できないか、と思量している。



6年1月1日)に掲載されたもので、許可を得て転載しています。

はじめに

東京郷友連盟の集まりで、「モンゴル軍がヨーロッパに侵攻し、ウイー

ンのすぐそばまで迫ってきた」という話が出たことがあった。自分たちは全く異なる価値観を持つ国との戦いについては、私たちも対岸の火事ではなく、差し迫った大きな問題

として捉えなくてはならない。そこで今回は、モンゴル軍のヨーロッパ侵攻から400年以上後の話になるが、イスラム勢力との戦いで活躍した、オーストリアの従軍司祭を紹介したい。そして彼の行動から、私たちが何を学ぶことができるのかを考えたい。

アーノは、オーストリアの皇帝レオポルト一世に仕え、ウイーンを包囲したオスマン帝国軍を撃退する際に活躍した司祭である。

注1・日本では、カトリックの聖職者

司祭になり各地に赴いた後、マルコは、オーストリア皇帝レオポルト一世の靈的指導者になつた。靈的指導者というのは、信仰を助け導いてくれる人のことだが、身近な悩みや将来のことなどを相談する相手となることも、往々にしてある。レオポルト一世はマルコを大変信頼しており、信仰以外にも、様々なことを相談していたと、いくつかの文献に記述されている。

近世オーストリアの従軍司祭から学ぶこと

賛助会員 吉野 留美

従軍司祭とは

従軍司祭とはその名の通り、軍隊に所属している司祭(注1)のこと

である。軍の中で様々な行事や儀式を執り行なつたり、兵士たちの心のケアをしたりする職務を負つている。例を挙げると、殉職した兵士の

マルコ・ダヴィアーゴの功績

マルコ・ダヴィアーゴは1631年、ヴェネツィア共和国のアヴィ

アーノという町(現在は空軍基地がある)の、信仰心に篤い裕福な市民の家に生まれた。この時代のヨー

編集委員 この記事は、東京郷友連盟発行『わたし達の防衛講座』(令和

追悼ミサ、海外遠征前の激励ミサ、また、病氣や怪我で体が弱っている

度々受けており、マルコの出身地周辺でも、何万人という住民が犠牲になつていた。このような状況の中で

のケアとはその文字通り、精神的な支えをすることなので、軍における司祭の必要性は高い。外国へ派遣されることが多い。オーストリア軍の公式発表によると、現在、コソボ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、レバノンの各国に派遣された部隊に、従軍司祭が同行している。

スラム勢力から守るために、実際に戦場に行つて戦いたいという気持ちがあつた。しかし、最終的にはカプチン会という修道会に入ることを決めた。カプチン会ウイーン管区所蔵の資料には、マルコは自分の将来を決める際、「戦場で戦う以外にも、自分の国を守る方法がある」ということを、慈悲の光の中にみつけた」と書かれている。

司祭になり各地に赴いた後、マルコは、オーストリア皇帝レオポルト一世の靈的指導者になつた。靈的指導者というのは、信仰を助け導いてくれる人のことだが、身近な悩みや将来のことなどを相談する相手となることも、往々にしてある。レオポルト一世はマルコを大変信頼しており、信仰以外にも、様々なことを相談していたと、いくつかの文献に記述されている。

1683年、オスマン帝国軍にウイーンが包囲されたのだが、あわ

やといふところで「反転攻勢」がうまくいき、撃退することができた。その際の功労者の一人として、マルコの名前が挙げられている。

マルコが行なつたことは、まず、皇帝軍の中にポジティブで友好的な関係を築かせ、結びつきを強めることがあつた。兵士たちは様々な地方・地域から集まつてたため、敵対するようなこともあつたといふ。内部分裂してては、共通の敵に一丸となつて向かつて行くことなどできな

く、キリスト教徒の軍を強めてください」

「敵を壊滅させるために、兵士たちに強い力を与えてください」

これらを読むと、今の日本でサヨク活動家と一緒になつて国防に反対している「聖職者」達の偽善・詭弁がよくわかる。マルコは平和を愛する聖職者だつたからこそ、自国の平和を守るために戦う兵士たちを全力で応援したのだ。

い。

次に当然ながら、兵士たちの靈的指導である。平時であれば信仰を導き、ちょっとした悩みの相談も受けたであろうが、舞台は戦場である。ふとした時に出てくる、兵士たちの弱い心を鼓舞したであろうことは、想像に難くない。

そして、ミサの中でも度々兵士たちを激励しており、オーストリア軍が反転攻勢を掛ける直前にも、マルコは特別なミサを立てている。カプチン会ウイーン管区所蔵の資料に

は、このミサでの祈りの言葉が残つてゐるが、その中には以下のようないふべき、結果的にオーストリア文言が見受けられる。

「聖なる信仰を守るために戦いに赴

かつた。しかし、国内のウイーン以外の地では、おびただしい数の犠牲者が出了た。敵に攻めるのを思いとどまらせるような防衛体制を敷いていたら、どうなつていただろうか。手

を出したら、反対に壊滅させられるのではないかという不安を抱かせていたら、攻撃されなかつた可能性は極めて大きいと思う。また、事前に敵の動きを察知し先制攻撃ができるなら、そこで戦争は食い止められていたのではないかだろうか。

いくつかの文献には、皇帝レオポルト一世が優柔不斷だつたと記されている。彼が勇敢で決断力のある為政者であつたなら、この戦争は避けられた。あるいは被害が少なく済んだかもしれない。今の日本の安全保障環境は、かつてないほど悪いと言つていい。このような状況にも関わらず国防を重要視せず勉強もせず、勇敢でもなければ決断力も無いような人が国のトップであれば、最悪である。

我々はマルコの姿勢や行動から、実際に戦場に赴かなくとも、民間人を学べるのではないか。具体的にできることは、その人によつて異なる。

※ご参考..カプツィーナ教会は、ウイーン市内ホーフブルク宮殿近くにあり、教会内の礼拝堂にはオスマン帝国がウイーンを包囲したときに活躍したマルコ・ダヴィアーノ司祭の棺が安置されています。



自分は国を守るために何ができるのかを常に考え、できることからすぐ始めることが重要である。残された時間は、あまり無い。